

## マニラ湾の夕日

いまさら、言うまでもないことだが、予定通りの人生なんてそうあるもんじゃない。私の父はやりたいうことを山ほど残して、忽然と六十七歳であの世へ旅立った。

父が長年愛用した懐中時計が今、私の手許にある。

人生はここぞという時に決断しなければならぬことがある。父は何かを決断する時、必ずこの時計を取り出しじっと見つめた後、事を決めた。時刻を見ているのではなく独特のくせであった。

父が他界する前に聞いておけばよかったと思うことがいろいろあった。

息を引き取ったのは午前四時十五分だった。私はじっとしておれず、すれ違う人のいないほの暗い沿岸の道を、涙が出るままに歩いた。葉を食いしばって悲しみをこらえながら歩き続けた。

幾ら考えても何の足しにもならない物思いだとわかっていても、辛かった。

人付き合いを大切にされた父の姿勢を見習いたいとそう思った。

復員で両親のいる故郷に帰る時の心境は今でも忘れようもない。あの戦争の時代は遠くなくても、決して遠のくことのないさまじまな記憶が私にはある。

復員の汽車の窓から偶然見た長い葬儀の列には私は驚いた。一人の人間が死んだ時このように大勢の人に大切に見送ってもらったことなど、全く忘れていた私だった。

戦地では死んだら、ほったらかしが多かった。

栄養失調で死ぬのは玉に当たって死ぬより、残酷で悲惨なものであることも知らされた。やむを得ないものが、あったとも言えるが、多くの人が人間性を失っていった時代だった。

わが家に着き、只今と言ったら驚いた父がはだして飛び出して来た。

「おおー生きとったや、よかったーよう生きて帰れたねー、ほんとよかったー」と絞り出すような声で言った。母は

「お帰り」

と言つて目を赤くして、とつておきの白い米をとぎだした。

帰つてこないかもしれない息子を、どんな思いで待っていたのだろうか。

時代の流れの中で人間はどんどん変わっていくように思われる。時代はたしかに人間の考え方、行き方に変化をもたらす。

企業と社員、親と子、嫁と姑といった関係も昔のままではない。だが人間の内部、本音ということになると、何も変わっていないというのが真相だろう。どんな時代でも、親は子を気づかわざるを得ない。

仕事がなくお金がないと、人間の感情は荒れ、人間から優しさや思いやりや希望を奪っていく。

親に安定した収入があつて、何一つ不自由なく暮らしてきた若い世代の人がこれからはきついと思う。なぜなら切迫感のない生活を送ってきたから、何とかなるだろうという感覚が染み付いているから。

「自分のやりたい仕事にめぐり合わない」

「自分の本当の力を分かつてもらえない」

とか本気で思っているのなら、どうしようもない。

生きていることに苦しみを感じている人もいる今の世の中である。

若者は若者らしい、中年は中年らしい、老人は老人らしい、仕事をしっかりとやっていきたいものである。

「命に関すること意外は、人生の大事とは言わない」

父が残したこの言葉に、私は幾度か助けられてやって来た。

多くの親しい人を喪った私は人生は寂しいもんだという思いがして来る。私より若くしてこの世を去って行く友人がいると本当に切ない気になる。

戦争は残酷である。老後の頼りにしている子どもが死地に行くのだから。親自身にはどうすることもできないものであつた。

人前で涙を見せるのはみつともないという男の羞恥心を持っていた父だが、召集令状を持って来た時の

父の目は、少し赤かった。

息をのむほどの美しいマニラ湾の夕日を私は幾度も見た。世界的な景観といわれる夕日を見ては、故郷の両親を思った。

生きて帰るか、骨で帰るか、わからなかったが、できたら両親に元気な姿を見せたかった。

この夕日を共に見ながら涙した仲間のKは、疲れたような口調でこう言った。

「親より早く死ぬのは辛いよなあ」

マニラ湾に停泊することの多い、暁部隊だったので、船上や夕日の見える椰子の木陰で私はいろんなことを教えられた。同年兵のNから写真技術について徹底的に教育された。彼は写真のことになると人が変わったように厳しかった。

Fからは花札・トランプ・喧嘩の作法まで教えられた。

戦後、私は東南アジア各地を旅したが、この夕日を再度見たときの感動は、言葉にならないほど大きかった。

せめて二十五歳までは生きていたいと願った私だが、今年九十歳というところまで到達した。こんなに長生きするとは夢にも思わなかった。

あのマニラ湾の沈みゆく夕日に向かって、いつも手を合わせていた友らも今はもうこの世にいない。

